

砂川遊友アカデミー

■ 事業のねらい

自然体験活動を通して、知的好奇心を喚起し、主体的に取り組む意欲を養うとともに、地域や家庭における学びの取組の推進を図る。

- 実施日 平成 24 年 11 月 10 日 (土) ~ 11 日 (日) 1泊2日
- 参加対象 小学 4 年生 ~ 小学 6 年生 30 名
- 参加実績 参加者: 25 名
 小 2 = 1 名、小 4 = 6 名、小 5 = 4 名、小 6 = 14 名、
 男子 = 11 名、女子 = 14 名
 運営協力者: 大学生 4 名
 滝川市美術自然史館学芸員 茂野浩一氏
 有限会社 神内ファーム 21 専務取締役 古河和幸氏
 株式会社 ランドスケープタカラ常務取締役 渡部広幸氏
 株式会社 ランドスケープタカラ 厩務長 片山尚之氏
 宮島沼水鳥・湿地センター農学博士 牛山克己氏
- 備考 活動場所: 砂川少年自然の家、滝川市美術自然史館
 神内ファーム 21、宮島沼水鳥・湿地センター
 講師: NPO 法人楽知ん研究所理事 小出雅之氏

1 事業実施の背景

平成 24 年度全国学力・学習状況調査における本道の状況は、国で示された推計値による平均正答率が、小・中学校のいずれの教科においても、全国平均より低いという状況が続き、今年度新たに実施された理科についても、同様の結果が見られた。また、PISA 調査結果より学習意欲に個人差が広がっている課題が明確となり、家庭学習習慣も含めた学習習慣の確立、反復学習、実験などの体験的学習が必要とされている。また、平成 23 年度北海道教育委員会の活動状況に関する点検・評価報告書においては、今後の方向性として、新たな受検者層を開拓し、北海道の創造的発展を目指すため「ほっかいどう学ジュニア検定」を施行実施することが示されている。

本事業は、参加者による実地学習や科学実験、ほっかいどう学ジュニア検定の受検を通して、北海道や学習への興味関心を高め、地域や家庭における学びの取組の推進を図ることをねらいとして実施した。

2 プログラムデザイン

受付 11 月 10 日 (土) 9:30 解散 11 月 11 日 (日) 12:00

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
11/10 (土)		受付	農芸のつとめ	北海道探検バスツアー～自分で見て聞いて触れて～ (滝川市美術自然史館→神内ファーム 21 →宮島沼水鳥・湿地センター)				小出先生の科学 実験教室～大道 仮説実験(ころりん)～	夕食	挑戦!発見!北海道! ～北海道のことを知ろう～	入浴 就寝準備		就寝	
11/11 (日)	起床・朝食	自主学習	休憩	ほっかいどう学ジュニア検定	12:00 解散									

■ アクティビティについて



■ 意図

- ほっかいどう学検定公式問題集に出題されている問題のうち、空知管内で答えを確認できる場所に直接行き、地域の学びを深めるとともに学ぶ意欲を高めることを目指した。
- 身近な物での実験を通して、理科に対する興味・関心を高めることを目指した。
- 事業全体を通して、「教えられる学習」ではなく、参加者自身が予想を立て、自分で調べて学習を進めることを意識させた。
- ほっかいどう学検定を参加者が受検することによって、検定合格という目標設定ができ、目標に向かって個人や班で協力して達成できることを目指した。

■ 留意事項

- 事前に関係機関やボランティアと連絡を密にとり、事業の趣旨や内容、参加者に身に付けてほしいと思うこと等の打合せを何度も行った。綿密な事前打合せにより、当日は参加者にとって学びやすい環境設定となるよう心掛けた。

3 活動の様子



■ 当日の様子

1日目は、出会いのつどい後、北海道探険バスツアーへ出発した。バスツアーは、ほっかいどう学検定公式問題集に出ている問題の答えを、実際に参加者自身の目や耳、肌で確認することによって、参加者にとって活きた知識となることをねらいとして実施した。参加者は、タキカワカイギユウについて学ぶため、滝川市美術自然史館を訪問した。到着するまでの間、バスの中では大学生ボランティアがクイズを行った。ボランティアも一緒に学ぶ姿を見て、参加者は一層学ぶ意欲を高めていた。滝川市美術自然史館では、学芸員の茂野さんがカイギユウについての説明を縮小模型やパネル、骨格標本を使ってわかりやすく参加者に説明した。茂野さんの「みんながいるこの場所は、500万年前までは海だったんだよ。タキカワカイギユウも泳いでいたんだよ。」という言葉に参加者は目を輝かせていた。その後、各班で館内ウォークラリーを行い、参加者は限られた時間内で意欲的にミッションを達成させた。その後、神内ファーム 21 へ出発。神内ファームでは、ドサンコや馬の種類(軽種・中間種・重種・日本在来種)について、馬の大きさをの比較や、エサやりを行うことで、それぞれの馬の特徴や性格について学んだ。参加者からは、「ドサンコが予想より大きくてびっくりした。」「道産子が馬のドサンコからきていることを初めて知った」という感想があった。昼食後、宮島沼水鳥・湿地センターへ出発。宮島沼水鳥・湿地センターでは、渡り鳥のマガンとラムサール条約について説明を受け、朝方約7万羽のマガンが飛び立つ様子をビデオで観賞した。また、渡り鳥はすでに渡ったあとだったが、双眼鏡を使って宮島沼を見たり、マガンのエサとなる魚を採る体験も行った。参加者からは、「今度はマガンがいる季節に来て、マガンが飛び立つ様子がみたい」といった感想があり、宮島沼や環境への関心の高まりが感じられた。施設に帰所後、NPO法人楽知ん研究所理事 小出雅之氏による科学実験教室を体験した。大道仮説実験(ころりん)は、参加者が実験の答えの予想を立て、一つ一つ確かめながら実験を進めていくもの。終了後には、「楽しかった、家に帰ってまた実験してみたい」という多くの声があった。この日の様々な体験から、自分で予想を立てて学びを深めることの大切さを感じた参加者は、夕食後の学習時間でも、積極的に自分の考えを発言する姿が見られた。

2日目は、自主学習とほっかいどう学ジュニア検定の受験を行った。自主学習は、A5版の紙1枚につき2題の問題が記入された問題用紙を参加者は1枚ずつ解き、ボランティアにスタンプを押してもらうというスタイルだったが、ボランティアが汗だくなるほど、参加者の頑張りは素晴らしいものだった。自主学習後の検定にも真剣に取り組み、検定後には「実際に自分の目で見てきたから、答えがしっかりと頭に入っている」といった感想があった。

別れのつどいでは、「楽しく学習できて、ためになった」「この2日間で、勉強に自信がついたよ。学校の勉強ももっと頑張るね」など北海道や学習への興味関心の高まりが感じられた。

4 事業評価



■ 評価方法・重点

本事業では、確かな学力の定着のためには学ぶ意欲の向上が欠かせないと考えた。自分で課題を見つけ、その課題の解決策や解決方法を順序立てて考える力をつけさせるために「視野・判断」の向上について重点をおいた。

■ 参加者の変容【IKR調査結果】

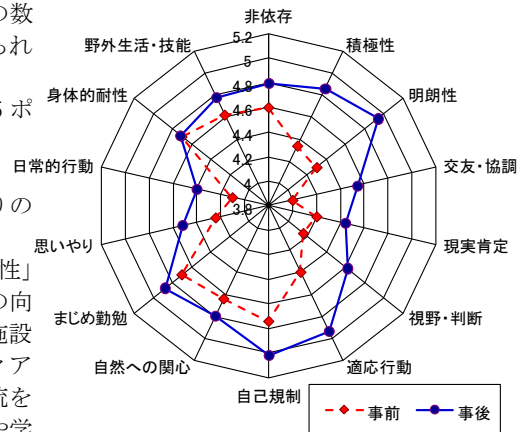
ほぼ全ての項目において事後が事前以上の数値を得、平均して0.3ポイントの向上がみられた。

重点である「視野・判断」については0.5ポイントの向上がみられた。

■ 結果の分析・考察

「視野・判断」については、ねらいどおりの向上があったと考える。

また、「明朗性」は0.6ポイント、「積極性」「公友・協調」「適応行動」は0.5ポイントの向上が見られた。本事業は、参加者の多くが施設の事業に初めての参加だったが、ボランティアが各自の役割をしっかりと把握し、班の交流を豊かにできたことや、館内ウォークラリーや学習時間内で、班の交流時間を有効に設けたことが要因だと考える。



5 まとめ



■ 成果

- 自分の学びたいことを、体験を通して学ぶことができたことにより、参加者は達成感や成就感を得ることができていた。
- 学習をねらいとした事業でも参加者が集まり、潜在的な欲求があることがわかった。

■ 課題・今後の方向性

- 予定していた定員まで募集人数がとどかなかった。広報活動はエリアを広げ、定員に達するための方策をとる必要がある。
- 宮島沼では、マガンが渡ってしまった後だったので、施設に帰ってきてからビデオで学習を深めてもよかった。